

機器分析評価センターの一年を振り返って

機器分析評価センター

専任教員 谷村 誠

2021年も新型コロナウイルスに振り回された1年になりました。2020年後半から2021年前半までの個人スケジュールを振り返ってみると、会議等は殆どがオンラインとなり、「出張」という言葉はどこかに消えてしまった感じです。夏場になると東京オリンピックが開催されたこともあり、少しずつではありますが平常に戻る雰囲気も感じていました。9月に入ると本学でも職場接種が始まり、機器分析評価センター（以下、センター）の職員全員が2回受けられたこともあって秋頃にはコロナに対する不安感も払拭されつつありました。後は冬を越えてくれれば・・・なんて思っていたのですが、年を越したらオミクロン株の蔓延です。一体、いつになったら収束するのやら・・・。

コロナ禍の中でもセンターは常時開館をしていました。密を避けるために職員は会議室等（コロナ禍で殆ど使うことが無くなったので）を用いて分散・個室化させ、マスク・アルコール消毒・検温を入館の必須条件とし、実験室での入室人数制限を設けて密を避ける工夫をしながらの開館でしたが、幸いにも利用者や職員の中で感染者は出なかったようです。その結果、2021年のセンター設置機器に関する総稼働時間はコロナ禍以前の水準に戻っています。職員が分散したことにより「装置に不具合が発生したのですが、〇〇さんは何処に？」と探し回る学生達の姿も散見されましたが、この点ではご不便をお掛けしましたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。

さてコロナ禍にあってもセンターは前進していく必要があります。着任してからは機器の流動化を重視する方針でセンター運営をしてきましたが、2021年も3台のリユース機器を無償で導入し、また1台を更新導入しました。これらの機器は全て学内外へ公開しています。中には古い機器もありますが、今までにない機器を導入することは新しいニーズ（新しい利用者という見方ですが）を発掘することにもつながっています。また自動化・遠隔化の試みも引き続き行っています。例えば、一部の機器では利用講習を動画配信し、利用希望者はそれを見てから実地教育を受けるという流れを作りました。利用者が多い機器の場合、動画を利用した機器講習は職員の講習負担を軽減する効果もでてきています。これもリモート会議等に向けた本学のインフラ整備が進んだため、と言えるでしょう。一方で実際の測定の場面に目を移しますと、遠隔化と相性が悪い機器はありますが、試験的に遠隔化公開に対応している機器もありますので、お気軽にご相談ください。

センターは本学での科学的価値を創造するための支援施設であり、機器の流動性をより高めながら、できるだけ広い分野かつ多様な分析に対応するように前進していきたいと思っています。2022年も皆様の御指導や御支援を賜りたく、お願いを申し上げます。